

アオテアロア／ニュージーランドと オーストラリアの女性と余暇

ショーナ・トンプソン 著
大谷裕文 (訳)

□はじめに

ニュージーランドとオーストラリアの女性は、異なる歴史と文化を有している。マオリとアボリジナルの女性は、植民地化の経験を共有しているが、その詳細は異なっている。2つの国の植民地入植は同じ理由に基づくものではなかった。その後の移住パターンは異なっており、その地理も全く対照的であり、そして人々はすぐ識別できるほど異なる文化を発展させていった。したがって、あたかもそれが完全に均質の経験であるかのように、これら2つの国の女性の余暇について議論することは、困難でありかつ問題も含んでいる。その上、女性の余暇経験は、両国間で異なっているのと同程度に、それぞれの国の内部においてもまた異なっているのである。

とはいえ、これら両国の女性が共有している、歴史、地理および文化の側面も認めることができる。筆者が焦点を合わせようと試みたのは、まさにこの共通点なのである。本章は、しかしながら白人中産階級のバイアスをもって書かれている。それは一般に、両国で支配的な文化を構成し、植民者の祖先、地球において相対的に隔絶された環境の中での開拓努力遺産の影響、ここから独自に発展したジェンダー関係の諸経験等、を共有している女性に焦点を絞っていることを認めねばならない。

筆者は最初に、女性の初期植民地レクリエーション経験について考察し、スポーツが男性の余暇経験の表れとなってきたが、女性経験の方は、家庭生活の期待と現実によって支配されていた状況に注目する。次に、余暇研究に対する国際的なフェミニズム第2波の影響が考察され、それが、私たちの余暇概念一般の、そして特定的には女性経験の理解にどのように貢献したのかが示される。その後、家族関係と不平等な分

業がどのように女性の生活を構築し、女性の余暇の継続的な周縁化を意味する、他者の余暇への奉仕がどのように行われているかを明らかにするために、フェミニスト・ベースの研究から出てきた一定の成果が提示される。

□余暇とスポーツの経験

世界のこの地域で生きる女性の初期の余暇経験について書かれていたものの大部分は、ヨーロッパの故国から持ち込まれた活動に従事する白人の植民地女性の生活を記録したものであるが、それは、開拓状況によって変更を被っている。例えば、クロフォード (1987) は、生き残りの必要に迫られて、19世紀イギリス中産階級社会において支配的であったような厳しい役割期待によって拘束されることの少ない生活を送っていた、ニュージーランドの開拓女性を記述している。彼は、男性と並んで働き、乗馬、川での水泳、カモ撃ち、カヌー漕ぎ、ハイキング、山登り、リュージュ、サイクリングのような、たくましい野外レクリエーションを同じように楽しむ農村共同体の女性を叙述した。彼は、およそ1860年から1920年にかけての期間を研究して、女性運動選手ではないとしても、間違いなくレクリエーション活動のおもしろさと自由を楽しむことを切望しているような女性を受け入れようとする社会的空気が、ニュージーランド植民地には存在した (Crawford, 1987: 175) と結論づけた。しかしながら、そのような自由は、キリスト教女子青年会などの組織が1886年という早い時期からニュージーランドの少女のために身体的レクリエーションを奨励していたにもかかわらず (Coney, 1986), 「母親、妻、主婦、国家建設者、および道徳調停者としての婦人の本当の職務」 (Lynch and Simpson, 1993: 59) を強調するキリスト教の教えによって縮減されていった。

しかしながら、スポーツは、最も顕著な男の領分であり、両国において台頭しつつあった男性のナショナル・アイデンティティの土台を成すものであったので、女性からの攻撃は如何なるものであっても、それから強く保護されたのである (Phillips, 1987; Stoddart, 1986; Summers, 1976)。女性がスポーツに参加する機会は、何をプレイすることができるのかという点に関しても、また、どのようにプレイすべきであるのかという点に関しても、厳しく制限された。クロフォード (1987) は、1891年のニュージーランドで、ミス・ニタ・ウェバーが、女性ラグビーチームの地方巡業の主

催を試みたか、一般大衆の抗議にあつて、その企画はすぐに放棄された経緯を記録している。ストダート（1986：139-140）は、1880年代にイギリスからオーストラリアにやって来た男性訪問者について次のように言及している。

オーストラリアの女性はイギリスの女性よりも活発にテニスに取り組み、時には1日あたり4時間もプレイすることに不安を覚えたが、過酷な競争よりもむしろ、女性の件の社会的ゴシップの方が主目的であることが分かって安心した。

テニスは、「スポーツ」というよりもむしろ社交的であったので（ibid：140）、婦人に「ぴったり」であると考えられていた。それにもかかわらず、1900年代初めから、女性は、ネットボールが支配的な女性スポーツとして両国で台頭するのに伴って、大規模にスポーツ・プレイに参加し始めた。イギリスから、バスケットボールに変更を加える形で導入され、ごく最近までは女性だけによってプレイされていた。1948年までは、ニュージーランドの全てのスポーツの中で、このスポーツは、男性のラグビーを除いて、最も多くの競技人口を有していた。マオリ族女性とヨーロッパ系女性の双方に人気があるので、1988年までに、ニュージーランドのすべての女性の10パーセントがこのスポーツを行っており、1992年には、他のどのスポーツよりも多くのネットボール加入クラブがあると見積もられた（Nauright and Broomhall, 1993）。ただオーストラリアのほうが、このスポーツが、女性の主要スポーツとして等しい重要性を共有しているニュージーランドよりも、多くのネットボール・プレーヤーを擁している（Jobling and Barham, 1990）。

女性に人気のある余暇活動として幾つかのスポーツが出現してきたにもかかわらず、両国でのレクリエーション・パターンに関する最近の調査によれば、全体的に見て大人の女性でスポーツに参加する人は、彼女たちの男性の相手方よりもはるかに少なく、またそれを同じ頻度で彼女たちの最も好きな活動であると考えているわけでもないことが示された。ニュージーランド人のレクリエーションの好みについての調査（Robb and Howorth, 1977）は、スポーツが男性の最も好むレクリエーション活動であることを示したが、女性の大部分は、家庭科やホーム・メンテナンスに区分されるような活動を選択していた。これには、料理、縫い物、家の改修、園芸などが含まれていた。調査において他の活動よりもスポーツを好む唯一の女性群は、10～19歳の年齢幅の女

性であった。

「ニュージーランドの生活」という後の調査 (Wilson et al., 1990) によると、好きな余暇活動として、組織化されたスポーツは、男性では6位であるが、女性ではかろうじて11位入っているだけであることが分かった。女性が最も好む5つの活動は、順番に、読書、友人の訪問、テレビ・ビデオ視聴、園芸、音楽鑑賞である。美術と工芸は7番目に入っている (Laidler and Cushman, 1991)。女性がクラブ施設を使う頻度は、男性よりはるかに少なく、育児設備の不足を自由時間の楽しみに対する制約と見なしている (Wilson et al. 1990)。

オーストラリアではマッケイ (1986) が、オーストラリア統計局の数値を検討した後で、同国が余暇に関しては平等主義的な国であるという従来の固定観念を覆した。彼が強調した不平等の1つは、スポーツとジェンダーに関するものであった。彼は、あらゆる年齢カテゴリにおいて、男性のスポーツ参加の方が、女性のそれよりもかなり多いことに注目した。彼は次のように結論づけている。

余暇は、文化一般の一部として、ただ単に個人的態度の観点からそれに言及することはできない。余暇には、誰の余暇活動を他者のそれよりも重要視するかという問題をめぐるヘゲモニー争いによって特徴づけられてきた歴史がある。そしてそれは構造化された社会的不平等という、より広い社会・歴史的コンテキストの中に定位されているのである (1986: 358)。

マッケイは、個人の選択、文化的制約、権力闘争の間の緊張関係を強調した。スポーツ・プレイを選択する両国の女性は、何が許容できる女性行動であると考えられているかによって、彼女らの選択が制限されていることを認めており、設備、支援、承認に対するアクセスの継続的な不平等性を立証することもできる。さらに私たちは、そもそも余暇とは何であるのかについての認識が、世界的に見てもこの地域では、もっぱらスポーツ活動によって支配され続けているという事実にも直面するのである。

ニュージーランドにおける全国調査では、非常に多くの女性が、しばしば家政学と関係するような、カジュアルで家庭ベースの活動として自らの余暇を意味づけていることが示された。『ジェンダー、文化、権力』という本の中で、ジェームズとサヴィル・スミス (1989) は、彼らが「家庭生活礼賛 (The Cult of Domesticity)」と呼んだもののニュージーランドにおける発展を辿っている。それは、若い開拓国に社会秩序

をもたらす方法として国家によって入念に生まれ、維持されてきたものである。それは、ジェンダーによって非常に厳格に分割された文化を生み出した。その結果、女性は、男性が稼いだ「家庭収入」に依存するように誘惑されるとともに理想的な家庭環境を創り出すために完璧を目指すように奨励され、手に負えない開拓者の男達は信用のおける安定した稼ぎ手としての「所帯持ち男」に変わるように説得されたのである。マオリ女性も、同様に、伝統的な家族慣習からの強制を受けた。このような目的に向けて、家事はますます科学的な取り扱いを受けるようになり、女性は、プランケット協会の影響、少女向けカリキュラムへの家庭科の導入、さらに様々なメディア形態を通して、衛生、栄養およびその他細々とした家庭・母親の仕事の問題について鼓舞激励を受けるようになった。家政は、女性が自分を発揮し、評価を求め、自らのスキルに対する報酬を受けることができるわずかな方策の1つとなったのである。

□フェミニズムの影響

女性の余暇

1975年にオーストラリアにおいて「余暇～女性にとって不適切な用語か」と題する1つの論文が出版された (Anderson, 1975)。それは、メルボルンの女性についての研究に基づいており、余暇概念が女性に適用された際に生じる混乱に光を当てたものであった。それは、彼女たちの生活の常態を考慮して、女性に余暇が本当にあるのか否かについて問題を提起したものである。こういった関心、およびそれが女性経験の分析から生まれたという事実は、国際フェミニズム第2波の初期の影響を示しており、余暇における男女不平等についての認識の出現を告げるものであった。

数年後にタスマン海の両側で行われた2つの画期的な会議は、女性の余暇に関するフェミニスト的関心の高まりを表明するものであった。それは、1980年1月にオーストラリア・シドニーで開催された「プレイへの適性～女性・スポーツ・身体レクリエーションをめぐる第1回全国大会」と1981年8月にニュージーランド・ウェリントンで開催された「女性とレクリエーション大会」であった。これらの大会の双方で、女性のレクリエーションとスポーツに関する問題にフェミニスト理論の理解を適用せねばならない緊急の必要性が認められた (Hall, 1980; Darlison, 1981)。例えば、ウェリントン大会で発表したダーリソンは、特にスポーツに焦点を合わせ、スポーツウー

マンとフェミニストが、お互いに対話を始めることが如何に必要であるかを強調した。彼女は以下のように述べている。

あからさまに言えば、フェミニストは、女性不平等の理論的および実際の側面について十分に把握しているように思われるが、理論づけに際して、スポーツを理解もしていないし、考慮もしていない。他方、スポーツウーマンは、スポーツとレクリエーションにおいて彼女たちが直面する差別という、多くのあからさまな問題だけは理解している。しかし彼女たちは、これを性的不平等のより一般的な理解と直接結びつくことのない、単独の問題であるとみなし続けているのである (Darlison, 1981: 15)。

これらの大会は、両国において新時代を画するものとなり、レクリエーションに関心をもつ人々は、女性の余暇経験が、男性支配社会における女性生活の全般的状態を反映する差別と狭いジェンダー・ステレオタイプによって特徴づけられてきたことを集合的に理解するようになった。例えば、「ミス・スミスさんの自由時間：編み物のどこが悪い」(Gray, 1981)と題する、ウェリントン大会に提出された論文は、グレイが調査したニュージーランドのあらゆる階級の女性の間で最も一般的な余暇活動であることが分かった編み物、縫い物、かぎ針編み、パン焼きなどの伝統的な家事について論じている。彼女は、これらの活動が孤独で、私的で、低く見られていることを指摘した。彼女たちは、女性の家庭的責任の中に留まり、それに貢献し、他者に何も要求しないし、必要なときにいつも家族のために「そこにいる」女性の力を損なうこともしない。

この大会の論文集 (Welch, 1981) は、女性の余暇に関するさまざまな問題を描き出しており、その多くは今日でも引き続き主題として取り上げられている。例えばウォーカー他 (1981) は、余暇とレクリエーションについて報告された理解内容が非常にヨーロッパ中心であることを明らかにしている。彼らは、太平洋島嶼女性、とりわけサモア女性にとってのレクリエーションは、日々の活動から現れ、それから切り離されることなく、引き続き家族、コミュニティ、および教会と強く結びついていると述べている。

余暇研究へのフェミニスト的視座の適用は、これまで世界の様々な地域で行われて

おり、いくつかの点で重要性を有してきた。第1に、女性生活についての問題関心は、余暇を意味づけ、研究するのに用いられてきた構成概念の男性中心性を暴露した。例えば、フェミニスト社会学者のスミス（1979）は、女性の経験が適切に考察されていたなら、仕事と余暇という別々のカテゴリは決して現れなかったであろうと論じた。彼女は以下のように述べている。

私たちの基本的な枠組として家事を用いるならば、「仕事」と「余暇」の識別が可能であると考えerことはきわめて困難である。主婦、母親、および妻という役割の社会的な組織化は、[「工作中」と「「工作中ではない」]の区別に適合しない。仕事としての家事の概念でさえも、私たちが母親としておこなっていること概念上の本拠を奪ってしまうのである（Smith, 1979: 154）。

時間・空間的に分離された状態としての余暇の概念は、女性の生活と関連性を持つことはなかった（Shaw, 1985, 1991）。ベッチャイルド（1995）は、1980年代に出版された女性の余暇に関するフェミニスト本の書名に注意を払い、ディーム（1986）、グリーン他（1990）、ウインプッシュとタルボット（1988）、ヘンダーソン他（1989）等の例を挙げて、私たちの余暇理解と女性生活に対するその適用の間に見られる混乱と全般的な「適合性」の欠如を明らかにした。

また、フェミニスト的問題関心は、女性の余暇の条件と特質にも光を当てた。例えば、ウインプッシュ（1986）は、女性が如何に頻繁に余暇を楽しむ権利の不足を感じているかを示し、ディーム（1982, 1986）は、彼女らの余暇経験に差し障る、女性生活への様々な制約を見いだした。これらの中には、第1に、彼女たちの個人的自由に対する制約となっている家事と保育への女性の不釣り合いなほどに大きな責任、第2に、薄給・仕事の不安定性・経済的従属をもたらす資本と労働市場への女性の関係性、第3に、男性が空間・リソース・意思決定にかんして行使する統制、およびこの統制が彼らの必要と関心を満たすために用いられ、しばしば女性の排除へと至る方法、そして最後に、女性らしさの文化表象、およびセクシュアリティと生殖の観点から行われる女性の規定、さらに、その規定が許容できるあるいは適切だと見なす行動に向けて狭隘でステレオタイプのな制限を加える傾向等々、が含まれる。ウッドワードとグリーンによる研究は、究極の自由として描かれる余暇が、「実際には、女性の行動が

最も綿密に監視され、規制される生活の1側面となっている」(Woodward and Green, 1988: 131) という主張に彼らを導くことになったのである。

女性の余暇は抑圧的経験であるのか、それとも解放的経験であるのか、このような議論が女性の余暇の条件について私たちが理解してきたことの考察を踏まえて今も続いている。ウインプッシュとタルボットは、レジャーを通しての女性のエンパワーメントという考え方を探求し、女性がどのようにして「自分自身の人間関係に沿って自らの世界の活動範囲を再規定する」ことができるのかという問題の事例として、ペンゴ、ディスコ・ダンス、スポーツにかかわる女性の研究を提示した(1988: 88)。オーストラリアではウェアリング(1990)が、どのようにしてレジャーが、長子を出産した母親にとって、束縛の多い生活と母性に関する支配的で抑圧的な言説に対する抵抗手段となったのかを示した。同様に、ウェアリング(1991)とウォーレン(1995)は、青年期後期のオーストラリア女性が、どのように女性らしさの伝統的なステレオタイプに挑戦し、ロマンチックな異性愛関係に抵抗するために余暇を通じた機会を利用しているかについての立証を行った。またベッチルド(1995)は、喜びの概念を使用して、中年女性が余暇を経験する実情を探った結果、彼女の研究対象者はこの言葉にうまく馴染むことができたので、余暇の概念では果たし得ないような仕方、喜びの経験を説明することができることを見いだした。

家事分業

しかしながら、フェミニズム第2派の衝撃の20年後に、賃金労働力の人口学的特性にはかなりの変化が見られたが、家事分業は変わらなかったという証拠が示された。女性は、今もなお家事、子育て、親族とコミュニティの世話の大部分を行っている。オーストラリア人の時間利用に関するマーサーの研究(1985)は、誰が賃労働を行っているかあるいはいないかに拘わらず、女性の方が、男性よりもかなり多く家事と子育てを行っていることを示した。その後の研究によっても、このことは確認された(Baxter et al. 1990; Bittman, 1991)。「ニュージーランドの生活」という調査によると、家事に関わっている者の割合は、女性では93パーセントであるが、男性では僅か59パーセントに過ぎないという結果が出ており(Wilson et al. 1990)、他のニュージーランド・ベースの研究でも家事に関しては類似のパターンがはっきりと現れている(Koopman-Boyden and Abbott, 1985; Davey and Callister, 1994)。

こういった不平等な分業が持続していることの意味は、それが、女性の生活、特に彼女たちの余暇に強い影響を及ぼし続けているという点にある。それらは、ただ単に女性が利用することのできる余暇の総量あるいは余暇経験を規定する条件に影響を与えるだけではなく、また、女性の家事労働から最も大きな利益を得ている人々、特にパートナーと子供が享受する余暇の量と質に対しても大きな意味をもっている。女性が家事労働を行うとき、彼女たちは、他の人々の余暇のための時間をつくり、そのために直接的な貢献を行っているのである。デンプシー（1989）は、ニューサウスウェールズ（New South Wales）の小さな田舎町の事例を示している。同地の女性は、男性の余暇～それは同時に彼女たち自身の余暇を減少させ、従属化させるものであるが～を促進するために彼女たちの家事能力を活用することが日常的に期待されていた。男性がそれに報いることはなかったので、デンプシー（1989：27）は、「その関係は非常に一方的であり、レクリエーションのためのリソースの統制は、その状況を搾取的と記述することが当然であるほどまでに非対称的である」と述べている。

フェミニズムは、「その上に性差と女性の抑圧が構築されるイデオロギー基盤」として家族・世帯を捉える分析（Barrett, 1988：211）をもたらししたが、それは経済関係と家族イデオロギーとの相互補強関係を説明するものであった。余暇における現在進行中の男女不平等と搾取を研究する上で、異性愛を基盤とする家族・世帯は依然として重要な領域であり続けている。

□スポーツへの助力提供～事例研究

家族関係、性による分業、および妻と母性のイデオロギーがどのように女性の余暇経験を支配しているのかを明らかにするために、筆者は、西オーストラリア州パースで行われた質的調査の結果（Thompson, 1994）をいくつか提示することにした。それは、1つのスポーツ（テニス）と女性の様々な関係に焦点を合わせており、妻および母親としての女性の役割が、どのように彼女たち自身のスポーツ経験を構築し、彼女たちの家族メンバーの参加も促進していったのかを示している。

女性がどのように他者のスポーツに助力を提供するのかという問題についての筆者の認識は、1981年にアパルトヘイトの南アフリカを代表する男性ラグビー・ユニオン・チームが筆者の国で行ったツアーを1人のニュージーランド人として目撃したと

きに芽生えた。多くの女性が、このツアーに反対する大規模で凄まじい抗議行動に関わり、彼女たちの参加の理由もよく記録されている (Aitken and Noonan, 1981; Dann, 1982; Hall, 1981; Star, 1989; Thompson, 1988; Waring, 1985)。この抗議から、ウォー〈WAR〉～「ラグビー反対女性同盟〈Women Against Rugby〉」の略語～と呼ばれる組織が成長していった。この組織は、女性が、男や男の子のためのラグビーに助力を提供する労働、例えば衣服の洗濯、プレイヤーへの食べ物の提供、プレイしている若い息子のための買い物・運転・助言、食卓でラグビー話題にすること、夫がテレビを見ている間、子供を静かにさせておくこと等々、を止めるように求めた。こういった一見単純なレジスタンス行動によって、私たちは、如何に女性の仕事が男性のスポーツに貢献しているのか、そして、この場合は「国益」のために勝手に利用されてしまっているのかを悟るようになった。

筆者が後に、女性労働が、彼女たちの家族関係を通してスポーツ制度に助力を提供する過程をより綿密に研究するようになったとき、筆者はオーストラリアに住んでいた。同地で、筆者は、年少テニス選手の母親であったり、盛んにテニスに打ち込んでいる男あるいはベテラン・テニス選手自身の妻ないしは同棲パートナーであったりした46人の女性にインタビューを行った。これらの役割はしばしば重なっていた。西オーストラリア州でのテニスは、公有地に位置するコミュニティ・クラブを基盤としている。気候も味方してくれて、1年中、屋外スポーツをプレイすることができるので、テニスは、多数の女性、男性、および子供の参加者で賑わっている。テニスクラブは、パースの労働者階級の居住地域に位置しており、インタビューした女性の中にも、何名か労働者階級出身の人もいたが、このスポーツは、白人中産階級のオーストラリア文化によって支配されている。

女性プレイヤー～家族への取り組み

インタビューした女性のうち、全部で31名がテニス選手であり、その中の15名は、ベテラン・プレイヤー（40歳以上）として特に選別された人である。これらの女性は、自分たちのスポーツに熱心であり、今までに競技からかなりの期間遠ざかったことを思い起こさせる人はほとんどいなかった。しかしながらこれは、彼女たちにとって、このレベルの参加を維持することが簡単であったことを示すものではない。これらの女性は、非常によく準備が行き届いていることに誇りを抱いており、それこそが、妻

であり母であることと平行してテニスが続けていく上で必要不可欠であると考えていた。彼女たちは、自分たちのスポーツが家族の必要を満たす力にどのような明白な差し障りも及ぼさないようにするために、いかによく時間帯を考えているかについて説明をしてくれ、自分たちが切り盛りしている革新的な対処法についても話してくれた。例えば、ジーンは、テニスネットのポストの周りにベビーサークルをとりつけ、彼女がプレイしている間、その中に幼児を入れておくやり方を述べてくれた。

これらの女性が自分たちのスポーツを続けることが可能であったのは、このスポーツが母および妻としての彼女たちの責任を受け入れてくれるものであったからである (Thompson, 1992)。第1に、彼女たちは小さな子供と一緒にテニスに連れて行くことができ、そこではインフォーマルな協定によってお互いの子供の世話を見ることになっていた。アリスは次のような例を挙げてくれた。

テニスでは、一番小さな子供を除いて、子供の問題は起こりませんよ。生後4週間の時から子供をテニスに連れて行きましたが、それから約1年間、私がコートに入るときはいつも、彼はただ座って、大声で泣き叫びました。彼は、やがてコートの端に立って、声を限りに叫ぶようになりました。それはただびっくりするような出来事でした。それで、私がかつてプレイしていた女性のひとりが、ある日、彼のところに行って、叱りつけました。私たちは、以前に、「ただ彼を叱りつけてくださいね」と彼女に言っていたのです。というのは、彼女が彼を叱りつけると、彼はすぐに止めるからです。

第2に、西オーストラリア州のテニスは、女性の第1の責務は家事の仕事と家族の世話にあるという前提の上に、周到に組織されていた。主な試合は、このような責務に支障を来さないように計画され、年長の子供は学校に行き、夫は通常仕事に出かけているウィークデイの午前9時から午後2時までに行われた。また、全ての関連社会行事もこの時間に計画されており、子供の学校が休みの間、試合は中止された。このようにして、これらの女性の余暇活動は、夫や子供の目からは見えないものとなっていた。モリーは、小さな農場と夫、そして4人の子供の世話をしながら、どのようにそれらに自分のスポーツを適合させていったかを述べてくれた。彼女の説明は、次の通りであった。

私は日課に従って働かなければなりませんでしたが、時には何かを省いて翌日に回すこともあります。そしてその日のテニスあまり重要でない日は、出かけていきますが、2セットだけそこに居て、家に帰り、それから家事に取りかかります。というのは、その翌日は、私のテニスにとって重要な日で終日テニスになるからです。そのようにして私は何とかテニスに対処してきました。子供や夫にも何とか対処してきました。

モリーは週末にはテニスをやらなかった。なぜならば、彼女の言によれば、「私は家族や夫と週末を過ごすようにしています、……私がテニスに行き、夫を家に残しておく、何か正しくないことをしているように思われる」からである。

私が、インタビューした一群のプレイヤーの中では、自分たちのプレイを目に見えるものとし、週末など家族の時間の中にまでそれを滑り込ませていく自由を持っている者は、夫もテニスをやっている人だけであった。これらの女性は、しばしば夫と子育てを分担していると話してくれた。例えばそれは、「私が子供の世話をし、次のセットで私がプレイするときは、夫が子供の世話をしてくれます」というプレンドの説明の中に伺われる。しかしながら、そのような手立ても、めったに女性のスポーツへの関与が男性のそれと平等であることを意味するものではない (Thompson, 1995a)。

また、テニスをやっている夫のいる女性は、それぞれのクラブと組織の継続的運営に必要なボランティア活動に関わるようになる可能性がより高かった。この仕事は、他者のための参加機会や余暇満足を提供することに役立つものであるが、その担い手は極端に女性に偏っていた。リンダのコメントは次の通りである。

私が気づいたことですが、この街の幾つかのクラブでは、継続的な資金調達为数多く行われており、社会委員会への大きな関与、富くじの運営、お祭りの主催等々、それらは専ら女性の肩にかかっているように思われます。これから起こるそのような出来事も、全て女性の肩にかかるでしょう。全くその通りなんですよ。男はそう言ったことを全然やりません。

テニスクラブでの女性の仕事は、主に社会的催事の召集、資金集め、そして、仕出

し等、極めて相互関連性の高い役割、すなわち家事や世話といった役割の延長としての性別タスクであった。実際、「仕出しの類の仕事、女らしい仕事は、全て女が行うのよ」というアリスのコメントの通りなのである。こういったサポート労働は、資金集めと子供トーナメントの組織運営という形で男性中心的な州テニス協会をサポートすることを目的として1963年に公式に創設された「女性補助部」を通して、テニス制度の中で構造化された。こういった彼女たちの貢献にもかかわらず、女性が「補助部」の外部で役職ないしは管理職に就いていることは稀であった。

ボイルとマッケイ（1995）は、クイーンズランドのローンボウリング・クラブにおけるジェンダー権力関係に関するさらに強力な事例を記録している。スポーツ・クラブのための彼女たちの長時間に亘る労働にもかかわらず、準会員の地位だけが女子プレイヤーに認められた。そして、クラブハウス、芝生、プレイ時間および会計を管理するのは男性であった。混合クラブでプレイするそのような伝統的な中産階級スポーツは、植民地時代の最も早い時期以来、余暇機会を女性に提供してきたが、それは何らかの大きな代償によるものであった。女性は、彼女たちの労働が男性の継続的な余暇機会のために搾取されながら、従属的な参加者であり続けてきたのである。その上、これらのスポーツは、伝統的なジェンダー役割と分業に挑戦するものというよりも、むしろそれらを維持するものであった。

プレイヤーの妻たち～打ち勝つことができないなら、仲間になった方が賢明

インタビューを行った34人の女性は、テニスを続けている男性と結婚した、あるいはドメスティック・パートナーとなった。特に15名は、このような関係のために特別にインタビューの対象となった人たちである。この後者の集団の半数は、自らはテニス選手ではなかった。こういった状況、すなわちテニス選手の配偶者がスポーツを行っていないという状況の下では、男女プレイヤー間の明暗は驚くほどはっきりとしていた。モリーおよび同様の事情を抱えている他の女子プレイヤーは、自分たちのスポーツが家庭に差し障りを全く与えないように、また家族メンバーの目にも触れないようにするためにきちんとした配慮を行っていた。この研究調査では多くの場合、男性が行うテニスは、家庭生活と家庭関係に非常に大きな影響を及ぼしていた。

最も大きな影響は、子育てに関するものであった。通常、自らはプレイすることのない、テニス・プレイヤーの妻たちは、子育ての責任からほとんどあるいは全く免れ

ることができず、余暇を取る手段を持ち合わせていないと考えていた。マリーの夫は、38年間の結婚生活すべてを通してテニスが続けてきた。彼らには、6人の子供がいたが、彼女は、これらの子供を「私の子供」と呼んでいた。というのは、彼女の話によれば、彼女が自分で彼らを育ててきたからである。彼女の回想は次の通りである。

子供が小さかったとき、私は、気が狂いそうになりました。私は怒り狂っていました。彼は肉屋だったので、バケツ何杯ものびしょ濡れになった血だらけのエプロン、バケツ何杯ものびしょ濡れのオムツ、それから山のような洗濯物がありました。さらに6人の子供。私は、お願いだから今日の午後テニスに行くのは止めてと頼みました。それでも彼は出かけました。彼は無慈悲でした。

タニアは27歳で、3歳未満の2人の子供がいた。「私は1人で子供を育てています、結局、絶対に私が必要としているパートナーがいると感じることはできません」と彼女は言った。これらの女性はそれぞれ、彼女たちの夫のスポーツに対する思い入れを深刻な結婚機能障害の原因であるとみなしていた。

これらの女性によって行われる家事がまたさらに、夫のスポーツを結果的に助長していった。アンシアも27歳であるが、子供がいないので、フルタイムの賃金雇用の職で働いた。彼女は明らかに彼女の家事労働が彼女のパートナーに与える利点を認めていた。彼女はこの点を次のように説明した。

えーとそうね、今、私たちは一緒に住んでいるので、私は料理でも何でもできるんですよ。それで、私が料理すべてをやっています。彼のプレッシャーは消えたみたいですよ。昔は、彼が家に帰った後、自分であれやこれやをやらなければならなかったのです。今、彼からそのプレッシャーがなくなったので、彼はもっとテニスをやっているのです。

テニスをする夫をこれらの女性向けに増長させていった仕事の中には、その他に、膨大な量の洗濯物（主に白物）と特別料理の用意が含まれていた。彼女たちはまた、テニスに関する男の会話で持ちきりになる社交行事や夫のスポーツ功績に向けての絶え間ない「耳」となることによって、夫のテニスクラブの管理任務を補佐することに

ついても言及していた。サリーが、彼女の夫のテニスに関して、彼女に対する最も大きな要求は何かと尋ねられたとき、彼女は、次のように応えた。

そうね、おそらく私の時間だわ。そう、彼が出かけていくことができるようにするために、あれやこれやの全ての時間よ。それは、彼が決して気づかないようなものだし、あなたも何らかの形でその対価を得ることができないものだけど、でも与えることが期待されているのよ。

サリーは、自身が非常に熱心なテニス選手である。しかし、ほとんどの類例において、女性プレイヤーは、どのようにして彼女たちの家事仕事や夫のスポーツを助長しているのかを認識していないのである。というのは、それが自分自身の参加を可能にするために彼女たちが行っている事柄の中に深く潜在しているからである。例えば、サラは次のように述べている。

昔、私たちが最初に結婚して街に住んだとき、私が、彼のためにランチ、アフタヌーン・ティー、それから服、その他色々用意したわ。しかし間もなく、私たちは田舎町に移り、私たち2人とも、生活パターンが変化したわ。といっても、私がまだ依然としてただ1人の主婦だったので、自然に私が洗濯をして食事を作ったわ。それでも私は、私たち2人がテニスに出かける準備をするために、それをするようになったの。だから、彼を行かせるためにテニス用具やその他あれこれのものを出しておく世話女房というわけではないわ。私たち2人が出かけるためよ。

両親がテニスをしている場合、普通、彼らの子供もまたテニスしていた。その結果、スポーツは、家族生活にとって特別な重要性を帯びることになり、それはスポーツが要求するサービス労働を増加させていった。ジューンはその1例である。彼女は、3人の子供がいる彼女の家族にとってのテニスの意味を「私たちの人生」と表現した。しかし、同時にそれは当初彼女の夫の関心に過ぎず、既に自分が所属しているテニスクラブに加入させるのに「十分な実力」がつくまで、彼が彼女を「鍛えた」経緯を説明してくれた。この活動を共有することが、彼らの関係にとって如何に重要であるかについて彼女は語り、それから、「もし私の夫が私を巻き込まなかったら、それでも

し私が巻き込まれなかったとしたら、私は非常に不機嫌な人間になってしまい、お分かりでしょうが彼の時間をもっと多く取ってしまったと思うのよね」と言って、彼の結婚は続かなかったかもしれない事情を説明してくれた。

女性たちはまた、彼らの夫がテニスに与える優先度を、「殊のほか高い」、「一番」、「彼はそれに取り憑かれてる」、「プレイしないなら彼は死んでしまうかも」等々、最高級を使用する極端な言葉で表現した。彼女たちは、「打ち勝つことができないなら、仲間になった方が賢明」という古い諺を持ち出した。テニスをしない妻、特に幼い子供がいる者は、彼女たちの夫の余暇の優先性を打ち破ることができないことに対して強い怒りと反感を表明した。その「仲間」になった妻は、その利益の共有を通して、自分自身の参加と余暇に与る資格を手に入れることができた。ただし、彼女たちの夫が選択したと思われる活動領域においてではあるが。

プレイヤーの母親～午後は毎日運転

テニス・プレイヤーの妻たちは、彼女たちが自分の結婚やパートナーシップに貢献した労働から何らかの互惠の見返りを期待していたが、ジュニア・テニス・プレイヤーに奉仕する母親の労働は、かなり異なる基盤に基づいて行われていた。母性のイデオロギーには、自己犠牲と余暇受給権後回しの考え方が包摂されている。

インタビューを行った女性の中で29人は、テニス・プレイヤーの母親であり、その中の16名には、当時、西オーストラリア州ジュニア代表チーム・メンバーの子供がいた。これらの子供の年齢は、10歳～17歳であった。このようなレベルで子供がテニスを行うことの意味について、それらの女性が語ってくれた事柄は、子供のそのようなスポーツ活動を促進していくためには莫大な労力がかかるということをはっきりと示していた。

何と言っても、最大の負担は、移動に必要な手段を提供すること、すなわち、多くの練習・競技を行う場との間で子供の送迎を車で行うことであった。多くの子供、特に年長の子供に関しては、1年のほとんどの期間（全てではないが）を通して、週末だけではなく、平日の午後も、いつも学校が終わると直ぐに、こういった送迎が繰り返された。こういった送迎ドライブについて、母親たちは、それに費やす時間の長さ、それがもたらすストレス、他の務めとの関連でこの献身的仕事を何とかやり繰り返すのに要する労力等の点を論じた。例えば、イヴォンヌは次のように説明した。

私は、いつも疲れを感じていました。私って運転が嫌いなんです。運転に不安を覚えるたちなのに、午後はずっと運転で、決まった時間までどこそこに行っていなければなりません。それが本当に苦痛で、肉体的にも精神的にも。私は、息子の後をいつも急いで追いかけていたので、それが私の2人の娘に悪影響を与えているのを感じていました。時には午後6時半や7時半頃までは帰って来ることができず、それから、夕食など、そのようなことに取りかからなければなりません。娘たちは少しばかり寂しい思いをしていたと思うわ。

事実、これらの女性の日々の生活は、子供の活動を中心として組織されていた。キャスは次のように言った。

もちろん、3時半に私の娘を学校に迎えに行くと、彼女のテニストレーニング施設に4時15分までに着かなければならないので、私はいつも時計ばかり気にしています。そう1週間に4日もよ。

母親たちが、こういった仕事を主に行っていたので、練習計画・トーナメント日時・抽選の把握、イベント登録締め切りの順守、ラケット・ガット修理の手配、専用衣服の洗濯など、その他の組織運営上の実務もまた引き受ける傾向が見られた。ジルの説明は、「時間を賢く使えますよ、ただ運転だけではありません、彼らのテニスウェアを縫ったり、助成金や奨学金を手配したり、他のテニス選手を宿泊させたり等々、そこには一切合切が含まれます、そうまさしくそれら全てが！」というものであった。またベギーは、「私たちは、明らかにマネージャよ、息子がマネージャ、秘書、それから運転手を必要としていたのよね、いつもペーパーワークに対応しなければならなかったし、決して電話から離れることもなかった」と自分の役割を述べた。

このようなレベルでテニスが続いている子供を支えていく上で必要とされる日々の継続的な仕事は、父親よりも母親によってはるかに頻繁かつ規則的に行われていた(Thompson, 1995b)。それは、子育てと家事の延長であると考えられていたのである。

賃金雇用で就いている母親は、子供の放課後活動を利用することができるような仕方です。その手はずを調整していた。子供のテニスに対する父親の関与は、トーナメント、子供のコーチ、あるいは子供とのプレイ等々、特別なイベントへの参加という形をと

る傾向が強かった。これらは、より間欠的で、子育てというよりもスポーツと密接に関係しており、より柔軟に予定を立てることができ、有給労働を妨げる可能性もより少ないものであった。

インタビューを行った女性の中に、一方では、子供のスポーツへの助力を求める要求のために、「自分自身のためには何もできない」ことを認める者もいたのであるが、他方ではまた、子供のテニスを支えることが、様々な意味で自分たちの余暇であると述べる者もいた。いずれにせよ、彼女たちの余暇、あるいはその欠如は、母性によって規定されていた。しかしながら、それは、特殊な様式の母性であり、そこでは伝統的な性別分業が維持され、それに加えて彼女たちと子供との関係が子供の活動を中心とした生活構造の上に基礎づけられていたのである。

これらの女性は、オーストラリアにおける子供（娘・息子の双方）にとってのスポーツ経験のよく知られている重要性を再認するというやり方で、こういった関係やそれが彼女たちに求める仕事量を合理化していた。彼女たちの労働は、子供たちが首尾よく中産階級社会に適応できるようにするために、余暇という言葉に纏わる諸経験や技能・態度・社会的能力等の「文化資本」を子供に施す行為を包み込んでいるイデオロギイ的価値によって駆り立てられていた。これらの子供が、彼らの母親によって与えられる労働なしに、テニス選手として成功するなどということは、想像するのも困難である。多くの子供のスポーツがそれぞれそうであるように、ジュニア・テニスも、そのような労働を提供できる母親の能力と意志に過度に依存するような形で構造化されてきた。筆者の研究で述べてきた家族関係が、他のスポーツやタスマン海の両側で、多少なりとも経験されているということがあり得ないということを信じる理由は全くないのである。

□結語

私たちが、余暇のコンテキストの中で伝統的なジェンダー関係がどのように維持され受け継がれていくのかを見ることができるのは、家族の中の動態やレクリエーション・スポーツ等の保守的団体と家族との接点を研究することを通してである。資本への不平等なアクセス、非対称的な分業、伝統的な家族イデオロギー等に基づくこれらの関係こそが、他者のための余暇を促進しそれに奉仕する労働を彼女たちに要求しつ

つ、女性に平等な余暇への自由を与えることを阻み続けているのである。

私たちが、ジェンダー関係を最優先させるフェミニスト分析の必要性を理論的に乗り越えることができるのか否かについては、議論が分かれているが、今日では余暇研究へのより多元的なアプローチが適切であることも示唆されている (Deem, 1988, 1989; Sparks, 1988; Whitson, 1989)。しかし、余暇におけるジェンダーと権力の考察を捨て去ってしまうことは、明らかにまだ時期尚早である。異性愛関係と家族・世帯は、多くの女性に対して余暇の平等を享受する権利を否定しながら、他方では男の生活を優先させるという形で、非対称的であり続けているからである。

謝辞

一コマ漫画は、ニュージーランド・ワイカト大学教育学部ドーン・ラタナ氏による。

推薦図書

- Deem, R., 1986, *All Work and No Play? The Sociology of Women and Leisure*, Milton Keynes, Open University Press.
- Thompson, S.M., 1990, 'Thank the ladies for the plates: The incorporation of women into sport', *Leisure Studies*, 9(2): 135-143.
- Welch, A. (ed.), 1981, *Papers and Reports from the 1981 Conference on Women and Recreation*, Wellington, New Zealand Council for Recreation and Sport.
- Wimbush, E. and Talbot, M. (eds.), 1988, *Relative Freedoms*, Milton Keynes, Open University Press.

参考文献

- Aitken, J. and Noonan, R., 1981, 'Rugby, racism and riot gear', *Broadsheet*, 94: 16-19.
- Anderson, A., 1975, *Leisure, An Inappropriate Term For Women?*, Canberra, Australian Government Publishing Service.
- Barrett, M., 1988, *Women's Oppression Today: The Marxist/Feminist Encounter*, London, Verso.
- Baxter, J. et al., 1990, *Double Take: The Links Between Paid and Unpaid Work*, Canberra, Australia Government Publishing.
- Betschild, M., 1995, 'Towards a theory of leisure and pleasure: New perspectives on women's lived experience in midlife', *Proceedings of the ANZALS 'Leisure Connexions' Conference*,

- Lincoln University.
- Bittman, M., 1991, *Juggling Time. How Australian Families Use Time*, Canberra, Office of the Status of Women.
- Boyle, M. and McKay, J., 1995, “‘You leave your troubles at the gate’: A case study of the exploitation of older women’s labour and “gleisure” in sport’, *Gender and Society*, 9(5) : 556-575.
- Coney, S., 1986, *Everygirl. A Social History of Women and the YWCA in Auckland*, Auckland, YWCA.
- Crawford, S.A.G.M., 1987, ‘Pioneering women : Recreation and sporting opportunities in a remote colonial setting’, in J.A. Mangan and R.J. Park (eds.), *From ‘Fair Sex’ toFeminism*. London, Frank Cass.
- Dann, C., 1982, ‘The game is over’, *Broadsheet*, 97 : 26-28.
- Darlison, L., 1981, ‘The politics of women’s sport and recreation : A need to link theory and practice’, in A. Welch (ed.), *Papers and Reports from the 1981 Conference on Women and Recreation*. Wellington, New Zealand Council for Recreation and Sport.
- Davey, J. and Callister, P., 1994, ‘Parents in paid work : The work force patterns of parents with children under five years of age, *New Zealand Sociology*, 9(2) : 216-242.
- Deem, R., 1982, ‘Women, leisure and inequality’, *Leisure Studies*, 1 : 29-46.
- Deem, R., 1986, *All Work and No Play? The Sociology of Women and Leisure*, Milton Keynes, Open University Press.
- Deem, R., 1988, ‘Together we stand, divided we fall : Social criticism and the sociology of sport and leisure’, *Sociology of Sport Journal*, 5(4) : 341-354.
- Deem, R., 1989, ‘New way forward in sport and leisure studies’, *Sociology of Sport Journal*, 6(1) : 66-69.
- Dempsey, K., 1989, ‘Women’s leisure, men’s leisure : A study of subordination and exploitation’, *Australian and New Zealand Journal of Sociology*, 25(1) : 27-45.
- Gray, A., 1981, ‘Mrs Smith’s free time : What’s wrong with knitting?’, in A. Welch (ed.), *Papers and Reports from the 1981 Conference on Women and Recreation*, Wellington, New Zealand Council for Recreation and Sport.
- Green, E. *et al.*, 1990, *Women’s Leisure, What Leisure?* Hampshire, Macmillan.
- Hall, M.A., 1980, ‘Women,sportandfeminism : SomeCanadianandAustraliancomparisons’, Paper presented at the ‘Fit to Play’ National Conference on Women, Sport and Physical Recreation, Sydney, Australia.
- Hall, S., 1981, ‘Dykes against the tour’, *Broadsheet*, 92 : 10.
- Henderson, K. *et al.*, 1989, *A Leisure of Ones’s Own : A Feminist Perspective on Women’s Leisure*, State College, PA, Venture Publishing.

- James, B. and Saville-Smith, K., 1989, *Gender, Culture and Power*, Auckland, Oxford University Press.
- Jobling, I. and Barham, P., 1990, 'Early development of women in Australian sport: Socio-historical issues', *Third report on the National Sports Research Programme*, Canberra, Australian Sports Commission
- Koopman-Boyden, P. and Abbott, M., 1985, 'Expectations for household task allocation and actual task allocation: A New Zealand study', *Journal of Marriage and the Family*, 47: 211-219.
- Laidler, A. and Cushman, G., 1991, 'Life and leisure in New Zealand', Paper presented to the World Leisure and Recreation Congress. Sydney, Australia.
- Lynch, P. and Simpson, C., 1993, 'Gender and Leisure', in H.C. Perkins and G. Cushman (eds.), *Leisure, Recreation and Tourism*, Auckland, Longman Paul.
- McKay, J., 1986, 'Leisure and social inequality in Australia', *Australia and New Zealand Journal of Sociology*, 22(3): 343-367.
- Mercer, D., 1985, 'Australian's time use in work, housework and leisure: Changing profiles', *Australia and New Zealand Journal of Sociology*, 21(3): 371-394.
- Nauright, J. and Broomhall, J., 1993, 'A woman's game: The development of netball and a female sporting culture in New Zealand 1906-1970', Paper presented to the Conference of the Australian Society of Sports History, Launceston, Australia.
- Phillips, J., 1987, *A Man's Country?* Auckland, Penguin.
- Robb, M. and Howorth, H., 1977, *New Zealand Recreation Survey: Preliminary Report*, Wellington, New Zealand Council for Recreation and Sport.
- Shaw, S., 1985, 'Gender and leisure: Inequality and the distribution of time', *Journal of Leisure Research*, 174: 266-282.
- Shaw S., 1991, 'Women's leisure time-using time budget data to examine current trends and future prediction', *Leisure Studies*, 10: 171-181.
- Smith, D., 1979, 'A Sociology of Women', in J.A. Sherman and E.T. Beale (eds.), *The Prism of Sex: Essays in the Sociology of Knowledge*, University of Wisconsin Press.
- Sparks, R., 1988, 'Ways of seeing differently: Complexity and contradiction in the critical project of sport and leisure studies', *Sociology of Sport Journal*, 5(4): 355-368.
- Star, L., 1989, 'Telerugby — Tele90 — Tell it Rightly', *Race Gender Class*, December.
- Stoddart, B., 1986, *Saturday Afternoon Fever. Sport in the Australian Culture*, London, Angus and Robertson.
- Summers, A., 1976, *Damned Whores and God's Police. The Colonisation of Women in Australia*, Melbourne, Penguin.
- Thompson, S.M., 1988, 'Challenging the hegemony: New Zealand women's opposition to

- rugby and the reproduction of a capitalist patriarchy', *International Review for the Sociology of Sport*, 23(3) : 205-212.
- Thompson, S.M., 1992, "'Mum's tennis day": The gendered definition of older women's leisure', *Loisir et Societe/Society and Leisure*, 15(1) : 273-291.
- Thompson, S.M., 1994, 'Servicing Sport: The incorporation of women's labour for the maintenance and reproduction of a social institution', Unpublished doctoral thesis presented to Murdoch University, Australia.
- Thompson, S.M., 1995a, 'Playing around the family: Domestic labour and the gendered conditions of participation in sport', *ANZALS Leisure Research Series*, 2 : 127-136.
- Thompson, S.M., 1995b, *The Gendered Servicing of Children's Tennis: An investigation of parental support*, Canberra, Australian Sports Commission National Sports Research Centre.
- Walker, M. et al., 1981, 'Women and recreation in Island communities', in A. Welch (ed.), *Papers and Reports from the 1981 Conference on Women and Recreation*, Wellington, New Zealand Council for Recreation and Sport.
- Waring, M., 1985, *Women, Politics and Power*, Wellington, Alien and Unwin.
- Warren, V., 1995, 'Young women's leisure: Conformity or resistance to ideological structures?', *Proceedings of the ANZALS 'Leisure Connexions' Conference*, Lincoln University, Canterbury, New Zealand.
- Wearing, B., 1990, 'Beyond the ideology of motherhood: Leisure as resistance', *Australian and New Zealand Journal of Sociology*, 26(1) : 36-58.
- Wearing, B., 1991; 'Leisure and women's identity in late adolescence: constraints and opportunities', Paper presented at the Australian Sociological Association Conference, Murdoch University, Australia.
- Welch, A. (ed.), 1981, *Papers and Reports from the 1981 Conference on Women and Recreation*, Wellington, New Zealand Council for Recreation and Sport.
- Whitson, D., 1989, 'Discourses of critique in sport sociology: A response to Deem and Sparks', *Sociology of Sport Journal*, 6(1) : 60-65.
- Wilson, N. et al., 1990, *Life in New Zealand Survey: Summary Report*, Wellington, Hillary Commission for Sport, Fitness and Leisure.
- Wimbush, E., 1986, *Women, Leisure and Well Being*, Edinburgh, Centre for Leisure Research.
- Wimbush, E. and Talbot, M. (eds.), 1988, *Relative Freedoms*. Milton Keynes, Open University Press.
- Woodward, D. and Green, E., 1988, "'Not tonight, dear!'" The social control of women's leisure', in E. Wimbush and M. Talbot (eds.), *Relative Freedoms*, Milton Keynes, Open University Press.